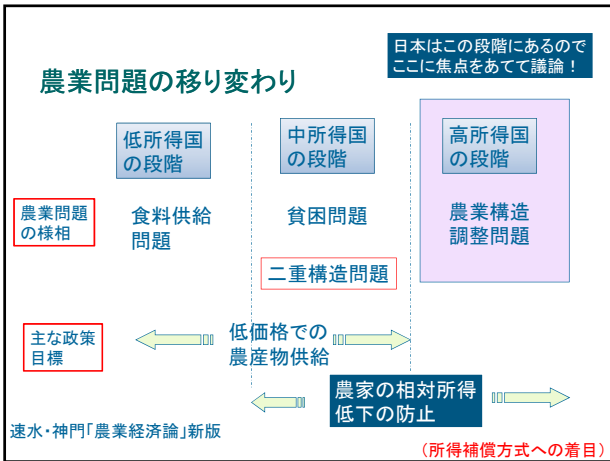




1-1 農業問題とは何か？ ①

- 農業問題は、時代や国の経済成長の度合いによって、また、地域によって発現する内容は異なってくる。
- 低所得国の農業問題は生産性の低さ、何よりも食料供給の問題としてとらえることができる
- 中所得国の農業問題は、経済の二重構造の問題としてとらえられることが多い。

二重構造とは、資本集約的な近代的技術を用いる大企業と、労働集約的な在来的技術による中小零細企業が併存し、生産性、資金の格差が開いていく現象。両者はまったく異なる論理のもとに動いていくが、互いに深く連結しあっている。典型的には、農業と非農業という対比でとらえられることが多い。



1-1 農業問題とは何か？ ②

- 日本は高度に発達した資本主義、そこでの農業問題は、二重構造問題から構造調整問題に移っている。
- 中所得国段階での農業の役割
  - 1) 低生産性部門に労働力を提供
  - 2) 安価な食料を供給
 非農業部門が成長を続ける限りは、農業部門の貢献が必要だが・・・
- 余剰労働力の供給がほぼ終わり、安価な食料の供給が海外に依存するという構造が定着。もはや二重構造の段階ではなく、低生産性で衰退しつつした農業(漁業も同じ)をどう新しい産業として再生するかという課題に直面

**(参考) 農漁業問題か、食料問題か**

- **食料問題**  
需要の伸びが供給の伸びを上回る結果、食料価格が上昇
- **農漁業問題**  
供給の伸びが需要の伸びを上回る結果、農水産物の供給過剰となり、食料価格がさがる。農業保護政策がとられる
- **最近(特にここ2~3年間)**  
食料問題として扱われることが多い。  
一方、世界貿易機構(WTO)の体制下で、食料貿易のグローバル化が進み、食料生産をめぐる競争関係が激化している。農漁業問題が発現している国・地域も多い

**2-1 あるべき農業構造改革と期待**

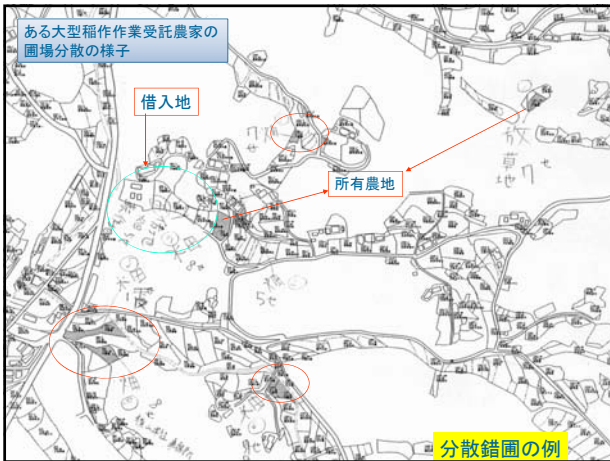
- 1970年代以降、土地利用型農業では機械化が急速に進展、労働節約的な技術が定着し普及した(機械化一貫体系)  
農業経営間には生産性の規模間格差が現れた  
これが経営規模の拡大に結びつくことが期待された
- 具体的には、
  - 1) 高生産性・低コストの大規模経営に農地が集中  
高生産性の土地利用型農業の成立
  - 2) 低生産性・高コストの零細経営の農業離脱  
農地移動による農地集中へ
 (生源寺真一)
- **しかし、現実には構造改革は進まなかった**

### 2-2 構造調整が求められる理由

- 構造調整は、農業と他の産業部門との間における資源配分の不均衡、非効率さとしてとらえられる
- 農業に投下された資源が多すぎる  
 資源が非農業部門に移動しないのか？ 労働が農業から離れ、すみやかに他の産業部門にいけば、農業における資源投入が非農業に比べて過大になることはないが、実際には過大なままに推移してきた
- 工業化の進展に応じた農業再編成が行われにくい  
 生産性を高めて成長をつづける工業部門と、保護を必要とする農業部門という対比・・・
- 構造調整を実施に移すことが地域問題(中山間地域等の条件不利地域、過疎地域等)として扱われる。政治問題化しやすい

### 2-3 農業構造改革の遅れ（具体的には）

- 土地をめぐる問題で、生産力の上昇や経営構造の改革がゆがめられた
- 具体的には
  - 1) 農家数は減少したが、耕地の流動化が進まず、残った農家が零細経営を克服することができない
  - 2) 農家は兼業化という形で土地を保有したまま脱農業化した
  - 3) 農地に対する転用期待：農地価格が高すぎる  
 農地価格が農業利用による生み出される収益によって決まらず、他産業・宅地への転用を見越したものに（農業がビジネスとして成り立たない）
  - 3) 分散錯圖(ぶんさんさくぼ)の状況が改善されない  
 生産性上昇のために農地を購入して1か所に集積したり、まとまって借りたりするのが難しい。耕地利用上の制限が働いた

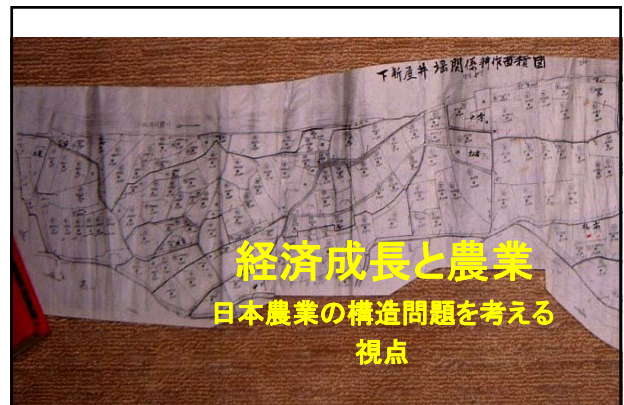


### (参考)アジア水田農業が分散錯圖的になる理由（日本ばかりではない現象）

- 灌漑稲作は、多雨を特徴とするモンスーン・アジアに発達
- 水をためて使う農業であり、水路と保水のための畦畔が必要
- 水路と畦畔によって農地は容易に区分できる(境界が明確になる)  
 \* 畑作農業では境界は容易に移動・変動
- 水田農業がもつ物理的特徴が社会に与える影響は大きい  
 水路と畦畔にもとづく面積と所得の明確化：支配システムの基盤となり、徴税体制を確立。労働集約的な性格をもつ灌漑稲作農業：高い人口吸収力  
 (稲作労働力を維持するための独特なメカニズム)  
 灌漑農業を支配する独特の社会システムが発展、etc
- 日本の第二次大戦後の農地改革  
 地主制を壊すことが目的だったが、対象となった地主の大半は中小零細地主  
 小作地の62%を耕作地主が所有。その82%が貸付地1ha未満の零細耕作地主(零細農耕作制そのものはかえられず)  
 農民的土地所有ゆえに零細であった農地所有をさらに平等に分配して自作農化した(これが戦後の出発点)

### 3 構造政策を求める世界貿易の流れ

- GATT(関税と貿易に関する一般協定)、WTO(世界貿易機構)のルール  
 生産を刺激し、自由貿易を阻害する財政支出による価格支持政策は禁止。支持水準を引き下げていくことが国際的に求められる。  
 => 自給率を高める政策と輸入自由化を進める政策が対立
- 市場原理により需給均衡で価格決定を行い、なおかつ農家所得を維持していくためには、生産性を高める必要があり、そのために実施する政策、これが「構造政策」となる。
- 「集中と選択」：農業の構造改革へ  
 経営能力のある専業農業者(法人含む)を担い手として育成し、農地を集積して規模拡大による生産性向上を目指す



千代田町：圃場整備事業導入以前(複雑な農地所有の実態)

1-1 農業経営の規模拡大

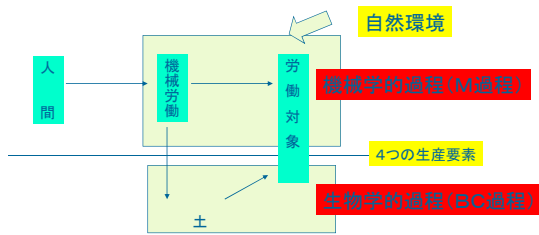
- 農業経営費には二つの要素: 特定の技術水準があるとき費用には2つの動きがある
  - ① 耕地面積の拡大によって比例的に増加する費用  
変動費 種子, 肥料, 農薬など
  - ② ほとんど増加しない費用  
固定費 農機具, 建物, 各種負担金など
- 単位当たり生産物 (規模が拡大すると)
  - 変動費 一定
  - 固定費 通減
 ここに規模が求められる理由(規模の経済)

1-2 農業生産と土地(2過程)

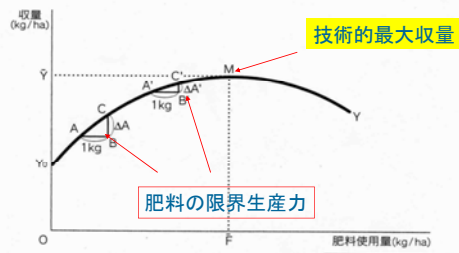
- 農業生産は2過程にわけてとらえることができる
- 1) 生物学的過程(BC過程)
    - 種子が成長して実をつけるという, 肥料や農薬が重要な役割を果たす過程
    - 農地の大きさは無関係。品種改良等の単収の向上によって生産力をあげることができる
  - 2) 機械学的過程(M過程)
    - トラクター, コンバイン等の機械を利用して生産効率を發揮するためには規模が必要な過程
    - 農地の大きさが関係
- 日本の農業経営の規模は零細であり, 農地分散している。BC過程は働くが, M過程が働きにくい

1-3 農業の独自性は土地生産性にある

- 「土地生産性」にあらわれる
  - 一般的な労働手段。同時に, 作物や根や肥料を収納し, 養分や水を供給してくれる器の役割 (田代洋一)



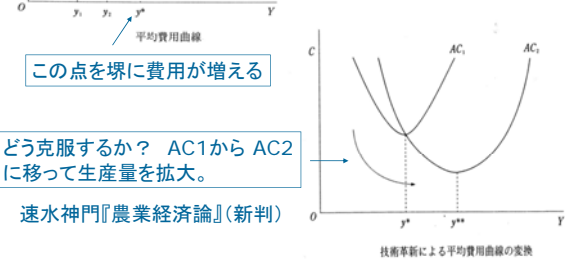
BC過程に働く法則: 収穫逡減の法則



収穫逡減の法則  
肥料を与えれば収量は高まるが, 肥料の増収効果はしだいに減っていく。技術的の最大可能量に達すると, それ以上は逆に減少になる。=> 経済的最適収量と関係してくる

ある技術体系下で生産量規模を拡大

1単位当たり費用(平均費用)は減少, 生産量規模を拡大すると, 費用は減少  $y_1 \Rightarrow y_2$



この点を堺に費用が増える

どう克服するか? AC1からAC2に移って生産量を拡大。

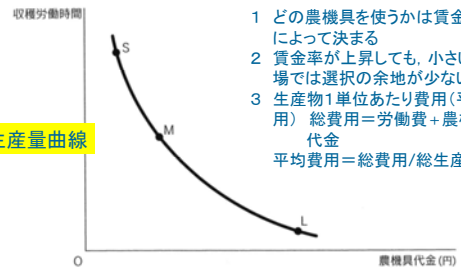
速水神門『農業経済論』(新判)

技術革新による平均費用曲線の変化

農機具代金と収穫労働時間の関係

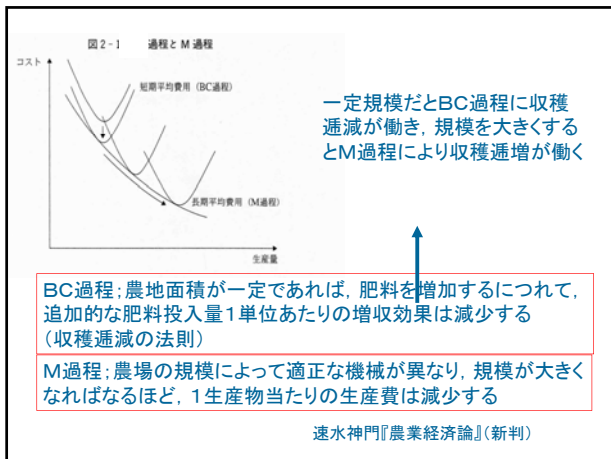
- 1 どの農機具を使うかは賃金率によって決まる
- 2 賃金率が上昇しても, 小さい農場では選択の余地が少ない
- 3 生産物1単位あたり費用(平均費用) 総費用=労働費+農機具代金  
平均費用=総費用/総生産量

等生産量曲線



S;カマ, M; 中型農機具, L; 大型コンバイン  
代金は時間数\*賃借料金

速水神門『農業経済論』(新判)



## 2-4 日本農業がめざすべき方向性

- 1) 単収を増加させて平均費用線を下方にシフト
- 2) 労働力よりも資本が豊富にあるので、資本集約型で、労働節約的な技術を採用（M過程の追求による費用低下）

資本を活用した大型機械化、農業規模を拡大。同時に単収の向上をめざす。

→ 結局、両方ともおそろそかになったのではないかな？

## 2-5 土地と規模の制約

- 自然条件は農業に適しているが、国土面積に占める農地の割合が低い。土地利用型農業の展開がとても難しい
- 諸外国との貿易で比較劣位に  
土地の賦存量が労働力や資本などの他の生産要素に比べて相対的に少ない
- 国際競争力がなく、比較劣位の状況に追い込まれた輸入農産物への依存
- 消費の変化に対応できない農業生産、土地規模

## 2-6 ヘクシャー・オリーの理論 ①

- 国と国との間の生産技術が同じでも、複数の生産要素が存在し、生産要素の存在量（賦存量）に国別の違いがあれば、貿易の利益が生じる
  - 1) 自国内で相対的に豊富に存在する生産要素を集約的に利用 ⇒ 財を輸出
  - 2) 自国内で相対的に少ない生産要素を集約的に利用 ⇒ 財を輸入

\* リカードの比較優位論からの発展
- 自由貿易は、生産要素の存在量を調整する役割を果たす

## 2-6 ヘクシャー・オリーの理論 ②

- 日本は、
  - 1) 資本が豊富であるため、対全世界比で30%超える部分が輸出にまわされる
  - 2) 労働・土地については、対全世界比で30%に満たない部分が、超過需要として輸入される。
- 日本の農産物輸入：海外からの土地純輸入として考えられる

## 演習問題

- 1) 日本の農業経営の特徴は規模の零細性にあるが、今後それをどのように克服したらよieldだろうか。農地の流動化に焦点をあてて考えられる方策を説明しなさい。
- 2) アジア・モンスーン稲作地帯の農業経営には規模拡大に制約がある場合が多い。BC過程を重視した対応をとる必要があるが、農業者はどのように対処すればよいであろうか。
- 3) 日本の農業が直面する構造問題とは何かを調べてみよう。